

## 教養コース ④ 国際社会学

### 「朝鮮半島の歴史と現在と日本」

#### 第4回 朝鮮民主主義人民共和国の国際関係

—アフリカなど「第三世界」との関係を中心に—

日 時 ; 2019年9月28日 10時~12時  
会 場 : 鶴瀬公民館 いきいき活動室  
講 師 : 高林敏之氏 (立教大学・早稲田大学講師)  
受講者数 ; 20人

本日の講義は、前回の残りの部分の解説と、本日の命題について、朝鮮民主主義人民共和国 (DPRK) は孤立しているのか? 対DPRK制裁に批判的な第三世界諸国、DPRKと最も友好的な地域—アフリカ、の3つの切り口で講義がなされた。



講師 高林敏之氏

1. ヴァンクーヴァー朝鮮「国連軍」関係国外相会合の意義 <前回の残り>  
2018年1月16日に国連軍に参加した21か国中の18か国+日本と韓国の20か国で開催。議長サマリーは、「米国と韓国が北朝鮮に対する敵対的な意図を抱かず、体制変革・不安定化、あるいは朝鮮半島の性急な統一を模索しないと繰り返していることを歓迎」し「その核計画を完全、検証可能かつ不可逆的に放棄する北朝鮮は国際社会において安全な場を有する」と明記し核開発の放棄を条件として安全の保障を確約すると言及している。

⇒2019年6月30日の板門店での米北韓の首脳会合は、朝鮮戦争を終戦させるという意味を象徴的にアピールするものになった。

2. 北方限界線 (NLL) <前回の残り>

停戦協定で定められた軍事境界線ではないこと。韓国側の北進挑発を阻止するために国連軍司令官が一方的に宣言したもの。二国間の海上境界線を確定する場合の国際海洋法の原則に違反すると言われている。

### 3. 朝鮮民主主義人民共和国（DPRK）は孤立しているのか？

DPRKと国交を有する国は約160か国。またEU28か国では、26か国が国交。国連加盟国は約195か国なので、「随分多いなあ」というのが教室の感想。非同盟運動（120か国）の加盟国－1975年加盟。反植民地主義、民族自決、国連軍司令部解体決議に結実し、国連の敵の立場から脱却、1991年に国連加盟（南北同時）。



講師からの問いかけ ⇒ 私たちが語る「国際社会とは」何だろうか？

### 4. 対DPRK制裁に批判的な「第三世界」諸国

国連総会DPRK人権決議の採決動向が2006年から2016年まで示されたが、賛成が反対を大きく上回っている。

また、「人権と一方的強圧措置に関する決議」が毎年、非同盟諸国の主導により賛成多数で採決されていることに留意。

ただ、核実験や経済的後退により「第三世界」諸国との関係も冷却気味ではあるが、国際社会から孤立しているわけではない。

### 5. DPRKと最も友好的な地域－アフリカ

#### 1) 西サハラを含む55か国の全てが国交を樹立

- ・1958～69年 急進派諸国との関係構築－社会主義国家の一員として
- ・1969～75年 穏健派諸国への関係拡大期－中ソ対立激化に対応して
- ・1975～80年 激しい解放闘争を経て独立した新興諸国との関係構築期
- ・1980～ 最も保守的な国々との修交期

「妙香山の国際親善展覧館に展示の贈物寄贈」からも親密さを見て取れた。

#### 2) 対アフリカ外交におけるDPRKの成功要因について

中ソ以上に鮮明な反植民地主義的姿勢、韓国との断交を求めず親善外交や技術・軍事援助を優先する金日成の柔軟な外交姿勢、植民地支配の経験。

#### 3) 1990年代以降の対アフリカ外交の衰退の要因

共産圏崩壊後の経済悪化による軍事・技術援助能力の減退、脱植民地化の一段落、一党独裁・軍事独裁体制の崩壊と政治自由化の進展、核開発。

#### 4) しかし、金永南による友好親善訪問などで友好関係を維持

受講して、世界の時代認識と日本のそれとは、ずいぶんかけ離れていることを痛感させられた一日でした。

